

【研究報告】

避難所疑似体験演習の効果と課題

—参加者へのアンケート調査より—

百 田 武 司^{*1}, 中 信 利恵子^{*1}

【要 旨】

必修科目「災害看護学」の一環として、震度6弱の地震が発生し、体育館に避難所が開設されたことを想定した一泊二日の「避難所疑似体験演習」(以下、本演習)を実施した。そして、本演習の効果と今後の課題を明らかにするために、演習参加者の大学4年生40名に無記名式質問紙調査を実施した(有効回収率100%)。

その結果、本演習の理解度について「理解できた」の合計がすべての項目で75%以上あり、また、本演習が「有意義であった」の合計も60%以上あった。そして、災害看護への「興味が深まった」の合計が約90%あり、将来の災害看護活動へ「参加したい」の合計が80%以上あった。従って、演習参加者にとっては、本演習は効果的なものであったと考えた。一方で本演習における避難所のリアリティー不足が課題であった。

以上から、本演習のための避難所のリアリティーの追求について検討が必要である。

【キーワード】 避難所, 演習, 災害看護学

I はじめに

日本赤十字広島看護大学(以下、本学)では、文部科学省の平成21~23年度「大学教育・学生支援推進事業」大学教育推進プログラムに、「もっと世界とクロスする救済ナースの育成」が選定された。このプログラムは、国際救援・開発協力看護師育成のための基礎コースとして体系的な教育課程を編成し実施するものである。内容としては、体系的に救済看護師としての基礎能力の開発を強化したプログラムを編成し、語学教育や国際救援活動の基盤となる専門教育を行い、大学と赤十字関連施設との連携により行うことで、大学教育と国際医療救済拠点病院における卒後教育に連続性を持たせ、これらにより、海外で災害救援や開発協力で活躍できる資質を備えた看護師を育成しようとするものである。

筆者らは、従来、学部4年生・編入4年生必修科目である「災害看護学」を担当しており、今回、このプログラムの具体的取り組みとして、「避難所疑似体験演習」(以下、本演習)を「災害看護学」の授業の一貫として実施した。

これまで、災害による避難所に関しては、実際の

災害被災地における避難所での実践レポート(森尾, 杉本, 助村, 脇, 2002; 山崎, 2007; 西上, 渡邊, 神崎, 2009)により、避難所における看護活動についての知見が報告されてきた。しかしながら、授業の一環としての避難所の演習については、避難所の空間区分についての演習の報告(川井, 2010)があるものの、実際に宿泊して避難所を疑似体験する演習についての報告は見受けられない。

そこで、本稿では、本演習の実施状況を紹介し、演習終了後に実施した参加者への質問紙調査の結果から、「避難所疑似体験演習」の効果と今後の課題を明らかにする。

II 本演習実施の状況

1. 本演習の目的と学習目標

避難所は本来の生活の場ではなく、一時的に暮らす場所であり特殊な状況にある(日本看護協会, 1998)。そこで、本演習の目的は、災害時の避難所の疑似体験をして、避難所生活における課題や看護職の役割について考察し、災害時の問題解決能力や状況判断能力、ヒューマン・ケアリングを実践する人間性を

*日本赤十字広島看護大学

強化することとした。学習目標としては、(1) 災害時の避難所について、机上シミュレーションと設営体験を通して、避難所のスペースや全体の配置について考えることができる、(2) 食材の準備から炊き出し、後片付けまでを体験し、避難者に必要な食事や栄養、衛生面について考えることができる、(3) 避難所の疑似体験として、体育館で宿泊することにより、避難所の環境について考えることができる、(4) 避難所における災害時要援護者に必要な支援について考えることができる、(5) 災害時の避難の際に必要な個人の装備や、避難所に必要な装備について考えることができる、(6) 災害時の避難所生活の課題や看護職の役割について考えることができる、とした。

2. 演習実施日時及び参加者

本演習は、2010年9月29日13:00から翌30日12:00まで、本学体育館で実施した。参加者は、「災害看護学」受講者137名のうち、希望した40名(当初希望41名、うち1名欠席)であった。また本演習の実施には、「災害看護学」担当教員2名が関わった。本演習を実施した時期は後期の授業が開始された直後であり、参加者は「災害看護学」の授業の一回目のみ出席した災害看護学の初学者であった。一回目の授業では災害看護学の概略を説明し、その中に避難所における内容も盛り込んだ。

3. 演習実施の内容

本学のある広島県廿日市市で震度6弱の地震が発生し、さらに同規模の余震が発生する恐れがあり、本学の体育館に避難所が開設されたことを想定し、一泊二日の避難所の疑似体験演習を実施した。

1) 災害情報

災害の状況は以下のように設定した。

2010年9月29日(水)午後2時に地震発生。かなりの恐怖を感じるくらいの激しい揺れ。体感、周囲の状況から震度6弱ぐらいと思われる。当日天候は晴れ、気温28℃。NHKのニュース速報では、以下のように報道された。

「本日午後2時頃、震度6強の激しい揺れを測定する地震がありました。」

震源地は安芸灘で、震源の深さは約50km、地震の規模(マグニチュード)は6.7と推測されます。廿日市市：震度6弱。この地震による津波の心配はありません。今後、この地震と同規模の余震が発生する恐れがありますので、十分に警戒してください。」

2) 参加者の場面設定

演習参加者は以下のように場面設定した。

あなた(演習参加者)はひとりで在宅中です。あ

なたは、けがをしていません。ただ、家族の安否が不明です。電話(固定電話及び携帯電話)が繋がりにくく、家族全員と連絡が取れません。今後、同規模の余震が発生する恐れがあり、自宅の耐震性が十分でないため、身の回りの支度をして余震がおさまるまで、近くの日本赤十字広島看護大学の体育館に開設された避難所で生活することになります。避難所には地区住民約40名が避難してきています。負傷者はいません。体育館内は特に散乱した様子はありますが、窓ガラスに一部ひび割れがあり、危険箇所が数カ所あります。体育館自体は、損傷は見当たらないと報告されています。体育館の電気、水道、ガス(シャワー用)は特に問題なく、使用可能です。ただし、トイレの配管の一部に損傷があり、トイレの使用は体育館2階の一カ所に制限されています。一方、道路には大きな損傷はありません。また、周辺の店舗は、耐震性が十分な店舗については営業しており、食材等の調達は可能です。避難所の運営は地域の役員が中心になって行います。また、避難住民の中に、元看護師、介護ヘルパー経験者と、赤十字救急法受講経験者がおり、元看護師を中心に避難住民の健康管理のために「生活環境班」として活動します。避難住民は、地域の役員を中心に、以下の役割分担をして避難生活を送ることとなりました。

- ①全体リーダー・サブリーダー、
- ②避難所設営班、
- ③夕食準備・後片付け班、
- ④生活環境班、
- ⑤朝食準備・後片付け班。

これらの班の配置は、演習の前に予め決めておき、参加者が事前に準備して演習に参加するように指導した。なお、上記班は、演習の展開により、臨機応変に全体リーダーが中心となり修正変更していくこととした。

本演習の状況は、次の通りである。

3) 本演習の準備

(1) 演習前オリエンテーション

演習に先立ち、6月上旬に本演習対象となる学生全員に、本演習について文書と口頭で内容の説明を行い、参加希望者を募った。さらに、9月上旬に、本演習参加予定者に、演習で想定する災害の状況を示し、演習のための準備を促した。

(2) 準備物品

本演習の準備に当たって、簡易間仕切り、簡易間仕切り更衣室、寝袋、ブランケットシート、非常持ち出し品、アルファ米の炊き出しセット(夕食用)、アルファ米(朝食用)、災害対策用鍋セット、災害対策用大型ケトル、カセットコンロ、ホワイトボード等を新規購入した。また、その他の調理器具や食

器は、演習が開始されてから学生が検討し買い出しをすることとした。その他、体調管理のための体温計、血圧計と、避難所に災害時要援護者を受け入れる学習のための車椅子、高齢者疑似体験装置、及びパーティション等は、学内の既存の備品を利用した。一方、参加者には、災害時の避難の際に必要な非常持ち出し品を考えて持参すること、暑さ・寒さ対策、防虫対策等を考えて準備するように伝えた。

(3) 避難所運営組織（参加者の役割分担）

避難所運営は住民自身による自主運営が原則（防災士研修センター、2009）とされるため、参加者がそれぞれ役割を持つことにした。参加者の事前の準備や学習のために、以下の役割分担（班）を予め決めておいた。①全体リーダー・サブリーダー、②避難所設営班、③夕食準備・後片付け班、④生活環境班、⑤朝食準備・後片付け班、⑥演習前準備担当班、⑦演習終了時後片付け班。これらの班にそれぞれ班長を決め、班単位で演習を実施した。

4) 1日目のプログラム内容

(1) オリエンテーション、災害意識の導入（災害映像鑑賞）

演習前に、参加者に災害意識を導入することは、参加者の危機意識・臨場感を高めるために重要とされる（北村、2010、名古屋市消防局、2001）。また、演習参加者が災害看護学の初学者であることもあり、演習開始に当たって、神戸市のホームページに掲載されている阪神・淡路大震災当時の映像を映写した。

(2) 非常持ち出し品の検討

各自が持ち寄った非常持ち出し品をグループ内で披露し、グループ毎に持ち寄った品をホワイトボードに書き出し、全体で発表した。また、演習のために事前に購入しておいた既製の非常持ち出し品を開け、各自の持ち寄った品との比較検討を行った。なお、ホワイトボードの記載は、演習終了時まで残し、演習終了時に振り返ることとした。

(3) 避難所立ち上げ図上シミュレーションと設営

避難所設営班が中心となり、実際に避難所を立ち上げ、設営する前に、図面上で避難所立ち上げのシミュレーションを行った。その際、生活空間を考慮し、就寝時の男女区分など体育館の配置を検討した。また、余震が来て危険箇所がないか、体育館の安全点検をし、危険箇所には立ち入り禁止区域を設定し、テープで目印をつけた。そして、実際に簡易間仕切りとパーティションを使用して避難所を設営した。

(4) 夕食検討、買い出し、調理、夕食、後片付け

夕食準備・後片付け班が中心となり、夕食の検討

を行った。参加者の意見を取りまとめて、献立を検討し、参加者の食品アレルギーの有無等を確認した。検討の結果、メニューはカレーライスとなり、必要な食材と調理器具等も検討し、近隣の店舗で購入した。米に関しては、事前に購入していたアルファ米の炊き出しセットを使用し、その他の調理は、体育館の外の玄関前でカセットコンロを使用して行った。

(5) 保健・衛生について

生活環境班が中心となり、参加者リストを作成し、体調管理のための、健康チェック（血圧・体温測定）、既往歴・現病歴等の確認や健康相談等を実施した。その際、複数で体温計を使用するために感染防止策をとる必要があったが、消毒が調達不可能という設定にした。そこで、代替策として、食品用ラップで体温計を被覆して使用する工夫をした。また、衛生管理のために、手洗い場への石鹸と手指消毒の設置、手洗いや含嗽励行の呼びかけやポスターの作成・掲示、調理用テーブルの消毒、救護所の設置、清掃確認、ゴミの管理等を行った。一方、ガスは特に問題なしという設定であり、参加者は体育館のシャワーを順番に使用した。

(6) 1日目のまとめ、就寝

全体リーダーとサブリーダーが中心となり、1日目の演習の振り返りを行った。この際、各班の役割状況を見直し、生活環境班の役割負担が大きいとして、この班の人数を増やすための調整を行った。また、就寝時の消灯について、参加者の意見をまとめて、消灯時間と消灯加減を検討した。結果的に23時頃、体育館の全ての電球を消灯した。

5) 2日目のプログラム内容

(1) 朝食準備、朝食、後片付け

朝食は予め購入していた、アルファ米の五目ご飯とした。これは、米飯を炊いた後に乾燥させたもので、これに湯や水を加えて柔らかくして食べるものである。演習では、朝食準備・後片付け班がカセットコンロで湯を沸かし、湯を注いだ。

(2) 災害時要援護者の受け入れ検討

避難所における災害時要援護者に必要な支援について考えるために、まず、災害時要援護者とはどのような人たちなのかを参加者で検討し、教員が指導した。そして、グループ毎に、要援護者（視覚障害者、高齢者、車椅子使用者）役になり、車椅子、高齢者疑似体験装置等を使用して、避難所のスペースの見直しや環境の整備について検討した。

(3) 2日間のまとめ、後片付け、解散

全体リーダーとサブリーダーが中心となり、グル

表1 演習のスケジュール

1日目（9月29日）	
時間	時間
11:00-12:00	演習準備（演習前準備担当班）
13:00	講義室201号室 集合
13:00-14:00	オリエンテーション、災害意識の導入（災害映像鑑賞） 各自が持ち寄った非常持ち出し品を披露し検討
14:00-15:30	避難所机上シミュレーションと設営
15:30-18:30	夕食検討、買い出し、炊き出し
18:30-19:30	夕食
19:30-20:30	夕食後片付け
20:30-21:00	1日目まとめ
22:00-	就寝
2日目（9月30日）	
時間	時間
6:00	起床
6:30-7:30	朝食炊き出し
7:30-8:00	朝食
8:00-9:00	朝食片付け
9:00-10:30	災害時要援護者の受け入れ検討
10:30-11:30	総まとめ
11:30-12:00	避難所片付け
12:00	解散
12:00-13:00	演習後片付け（演習終了時後片付け班）

ープ毎に2日間の演習の振り返り、発表した。そして、全員で後片付けして解散した。

なお、演習のプログラムの詳細については、表1に示した。

Ⅲ 本演習実施後の参加者への質問紙調査

1. 調査目的

本演習の実施内容について参加者の感想や意見を調査し、「避難所疑似体験演習」の効果と今後の課題を明らかにすることを目的とした。

2. 調査方法

筆者らが独自に作成した無記名の質問紙を本演習参加学生40名に配付し、本演習のプログラム終了後に回収した。

1) 調査内容

質問紙の内容は、基本属性、本演習での役割（班）、避難所についての

事前知識、本演習への参加の動機、本演習の時間や時期の適切性、本演習の理解度、災害看護への興味、災害看護活動へ意欲、本演習の感想や意見等について、選択肢（基本属性以外は5段階のリッカート尺度）と自由記載で構成した。

2) 分析方法

調査内容毎に記述統計を算出した。自由記載は内容分析を行った。

3) 倫理的配慮

調査の実施に際しては、質問紙に調査の目的、意義、及び無記名調査であるため、回答者個人が特定されないこと、得られた情報を外部に漏洩しないこと、成績評価等とは一切関係ないこと、得られたデータはこの調査目的以外では使用しないこと、調査への参加は自由であること、調査結果について、個人情報を守秘した上で、学会や学術誌等で公表すること等を明記し、筆者らが口頭でも説明を行った。また、質問紙の冒頭に、本調査の趣旨に賛同し調査に同意することの確認のチェック欄を設け、本演習場所である体育館の出入り口付近に設置した回収ボックスへの質問紙の投函をもって、調査への同意の確認とした。

3. 結果

1) 回答者の背景

本調査の回答者は40名で、全てを分析対象とした（回収率及び有効回収率100%）。性別は女性34名（85.0%）、男性4名（10.0%）、無回答2名（5.0%）であった。

2) 本演習参加前の避難所の事前知識・参加動機

本演習に参加する前に、避難所について知っていたかについて、「だいたい知っていた」が最も多く25名（62.5%）、次いで「どちらともいえない」10名（25.0%）であった（図1）。その理由について



図1 本演習参加前の避難所の事前知識

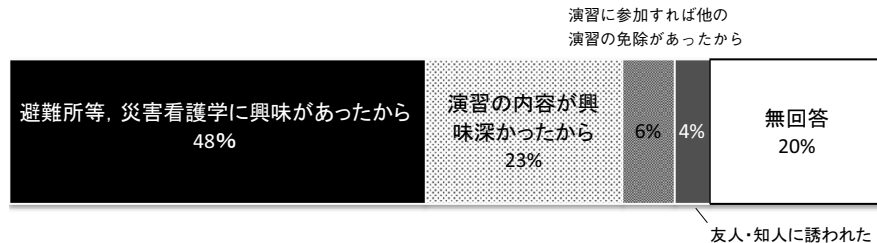


図2 本演習参加の動機

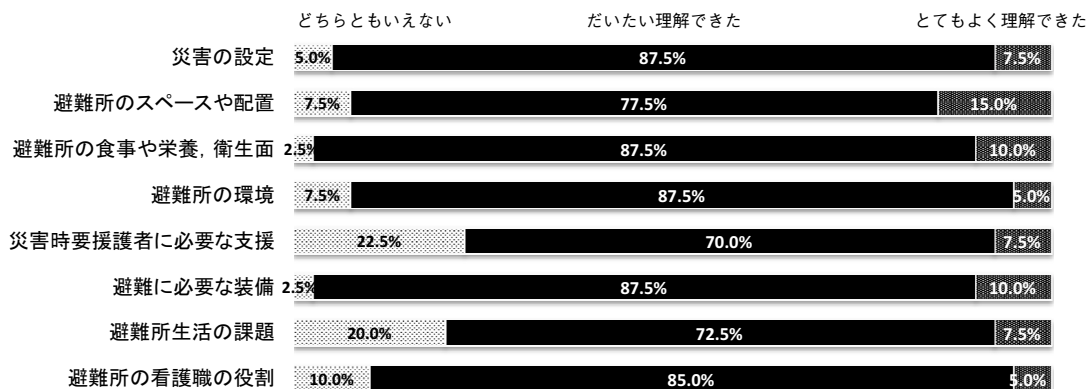


図3 本演習の理解度

の自由記載では、「大学入学前の中高生の時に学ぶ機会があった」、「災害の報道で知っていた」、「事前学習や本演習のオリエンテーションで知った」等であった。

本演習への参加の動機については、「避難所等、災害看護学に興味があったから」、「演習の内容が興味深かったから」という積極的な動機が過半数であった（図2）。

3) 本演習の時間や時期の適切性

本演習の時間については、「ちょうどよかった」が最も多く30名（75.0%）であった。その理由についての自由記載では、「これ以上やるのはストレスになる、体力的にきつい」等であった。本演習の実施時期についても「ちょうどよかった」36名（90.0%）で多かった。その理由についての自由記載では、「时期的に暑くも寒くもなかった」、「全ての実習が終了し、国家試験まで時間的余裕のある時期でよかった」等であった。

4) 本演習の理解度

本演習全体を通じた理解度を、（1）災害の設定、（2）避難所のスペースや配置、（3）避難所の食事や栄養、衛生面、（4）避難所の環境、（5）災害時要援護者に必要な支援、（6）避難に必要な装備、（7）避難所生活の課題、（8）避難所の看護職の役割について、それぞれ尋ねた結果を図3に示す。全ての項目において「だいたい理解できた」が最も多く、70%以上あり、これと「とてもよく理解できた」との合計は、全ての項目において75%以上あった。

5) 本演習が有意義であったか

2日間の本演習が有意義であったかどうかについて尋ねた結果、「だいたい有意義だった」23名（57.5%）、「非常に有意義だった」16名（40.0%）、「無回答」1名（2.5%）であった。さらに、本演習の（1）オリエンテーション、災害意識の導入、（2）各自が持ち寄った非常持ち出し品を検討、（3）避難所机上シミュレーションと設営、（4）夕食検

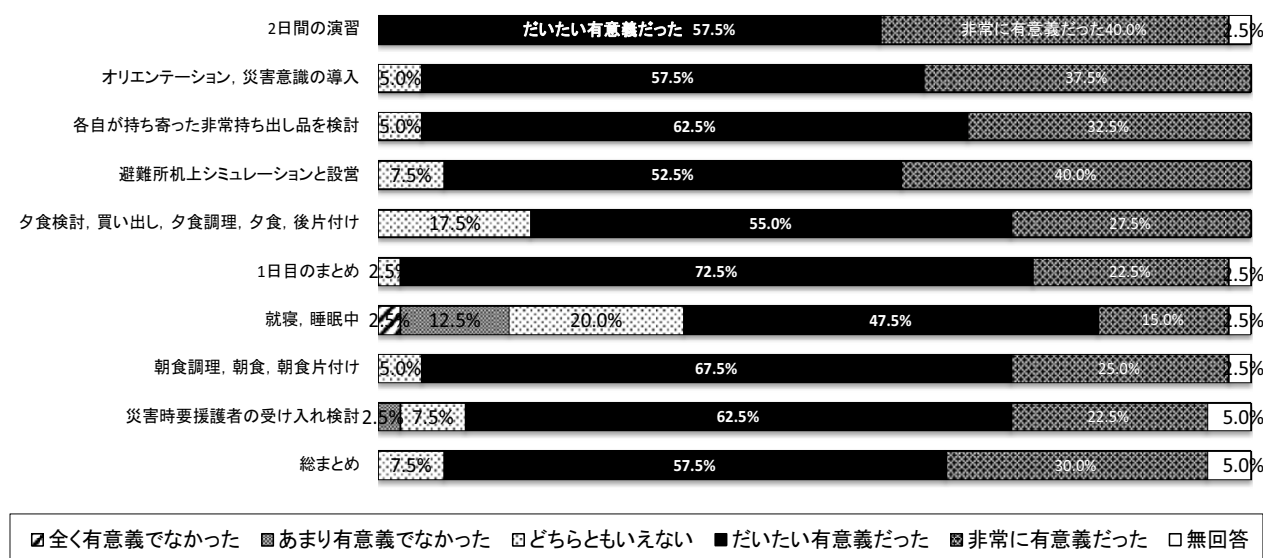


図4 本演習が有意義であったか

討、買い出し、夕食調理、夕食、後片付け、(5) 1日目のまとめ、(6) 就寝、睡眠中、朝食調理、(7) 朝食、朝食片付け、(8) 災害時要援護者の受け入れ検討、(9) 総まとめのプログラム別に有意義であったかどうか尋ねた結果を図4に示す。「だいたい有意義であった」と「非常に有意義であった」の合計が、「睡眠・就寝中」は約60%であったが、その他の項目は全て80%以上あった。

6) 本演習プログラム参加後の災害看護への興味・意欲

本演習に参加して災害看護への興味が深まったかについて、「やや興味が深まった」22名(55.0%)、「非常に興味が深まった」13名(32.5%)、「どちらともいえない」5名(12.5%)であった。災害看護活動に参加する意欲は高まったかについて、「やや高まった」22名(55.0%)、「非常に高まった」14名(35.0%)であった。今後もこのような演習があれば、参加したいと思うかについて、「できれば参加したい」17名(42.5%)、「とても参加したい」16名(40.0%)、「どちらともいえない」6名(15.0%)であった。

7) 本演習についての感想・意見

本演習についての感想や意見についての自由記載は以下の相反する2点にまとめられた。

(1) 避難所生活の具体的なイメージがつかめた

実際に体育館で一泊二日の避難所疑似体験をすることにより、避難生活の大変さを実感したことが述べられた。「床が堅くあまり眠れなかった、辛かった」や、「隣の人が近くにいて気をつかって眠れな

かった」、「話をしている声が響いて気になった」等、特に就寝時の体験として多く述べられていた。また、「2日目の疲労が凄かった」、「避難所生活が何日も続くと身体面でも精神面でも辛く、支援が必要と思った」等、避難所生活の困難な面について述べられていた。

(2) 避難所生活のリアリティー不足を感じた

本演習において、避難所の実際とはかけ離れていることが述べられた。「災害時の避難所の体験をするならもっと長く行った方がよかった」や、「実際はもっと設備が悪いはずで、演習ではシャワーも一カ所ながら使用でき、恵まれすぎていた」、「事前に役割が決められ、事前準備も行った上での参加で、実際はもっと苦労すると思った」等が述べられた。

Ⅳ 考 察

1. 本演習の効果

本演習実施後の質問紙調査の結果より、本演習の理解度について、「とても理解できた」と「だいたい理解できた」の合計が、全ての項目で75%以上あり、また、本演習が有意義であったかについても、「とても有意義であった」と「だいたい有意義であった」の合計が60%以上あった。そして災害看護への興味についても「興味が深まった」の合計が約90%あり、災害看護活動への参加の意欲についても「参加したい」の合計が80%以上あった。さらに、本演習についての感想や意見についての自由記載において、「避難所生活の具体的なイメージがつかめた」という意見があった。従って、参加者にとって

は、本演習は効果的なものであったと考える。

また、本演習についての感想や意見についての自由記載において、避難所生活の大変さを実感したことが特に就寝時の体験として多く述べられていたことから、実際に避難所を想定した体育館に宿泊して避難所を疑似体験した本演習は、避難所をイメージするために効果的であったと考える。

2. 本演習の課題

一方で、本演習についての感想や意見についての自由記載において、「避難所生活のリアリティー不足を感じた」という意見があった。筆者らは、本演習計画当初から、避難所について、どこまでリアリティーを追求するかについて苦慮した。参加者は国家試験を控えた大学4年生の学生であり、演習後の学習に影響を及ぼすような健康障害を極力避けたいと考えた。そのため、実施時期に関しては、季候がよく、また学生にとっては、実習が全て終了し、国家試験まで時間的余裕のある9月下旬とし、実施期間も長期間は避け、一泊二日とした。また、衛生面についても、トイレとシャワーの数を一カ所ずつ使用できるようにした。結果的に、これらの設定が、参加者の避難所生活のリアリティー不足と感じるところにつながったと考える。今後は、リアリティーの追求と、参加者の安全確保のバランスについて、さらなる詳細な検討が必要である。

また、本演習が有意義であったかについて、「就寝、睡眠中」以外の項目は、有意義であった合計が80%以上あったが、「就寝、睡眠中」のみ約60%にとどまった。この「就寝、睡眠中」が有意義でなかった理由の自由記載では「周りの音が気になり、狭く、床が硬いのが辛くあまり眠れなかった」や「夜間暑く寝付けなかった」など、演習で体験した困難や不快な状況が述べられていた。これは、参加者が体験したことをそのまま否定的な意味として捉えているものであり、避難所の特殊な状況下の理解に結びつけることにつながっていなかったと考える。従って、本演習で体験した困難や不快な状況を、避難所が本来の生活の場でなく、一時的に暮らす場所であり特殊な状況にある（日本看護協会、1998）ことを理解するという意義あるものとして意味づけられるような指導が必要と考える。

3. 本調査の限界

本調査は、本演習の科目「災害看護学」の単位認定者である筆者らが依頼し、実施した。そのため、本演習参加者である学生に調査参加への圧力がかからないよう、また成績評価等には不利益が生じないように細心の注意を払った。しかしながら、少な

らず強制力がかかった可能性があり、調査結果に影響が及んだ可能性も否定できない。今後は、調査方法について検討したいと考える。

V 結 語

必修科目「災害看護学」の一環として、震度6弱の地震が発生し、体育館に避難所が開設されたことを想定した一泊二日の「避難所の疑似体験演習」を実施した。そして、「避難所疑似体験演習」の効果と今後の課題を明らかにするために、演習参加者40名に無記名式質問紙調査を実施し、以下の知見を得た。

1. 本演習の理解度について、「理解できた」の合計が、全ての項目で70%以上あり、また、本演習が「有意義であった」の合計も60%以上あった。そして災害看護への「興味が深まった」の合計が約90%あり、災害看護活動へ「参加したい」の合計が80%以上あった。従って、災害看護学の初学者である参加者にとっては、本演習は効果的なものであったと考える。
2. 一方で、本演習について「避難所生活のリアリティー不足を感じた」という意見があった。従って、演習における避難所のリアリティーの追求と、参加者の安全確保のバランスについて、さらなる詳細な検討が必要である。

謝 辞

「避難所疑似体験演習」に対し、貴重なご意見を提供くださった演習参加者の皆様、また、本演習実施に際してご協力いただいた本学教職員の皆様に深く感謝申し上げます。なお、本演習の実施に際して必要な経費は、文部科学省の平成21～23年度「大学教育・学生支援推進事業」から得ました。

文 献

- 防災士研修センター（2009），避難所運営プログラム，2010年11月3日，<http://www.bousaishi.net/safe.pdf>
- 川井八重（2010），避難所の空間区分 地域看護学演習の一試み．*インターナショナルNursing Care Research*，9（1）153-158.
- 北村大樹（2010），災害対応能力向上のための図上訓練マニュアル（日本災害看護学会第12回年次大会プレ企画Ⅱ配付資料），13.
- 神戸市，震災復興映像クリップ，2010年11月3日，<http://www.city.kobe.lg.jp/safety/hanshinawaji/data/movie/m-index.html>
- 森尾眞介，杉本章二，助村 妙，脇 節子（2002）．

「高知県西南部豪雨災害」における地元保健所緊急対応の報告．日本公衆衛生雑誌，49（9），934－940.

名古屋市消防局（2001），災害図上訓練—マニュアル—（自主防災組織訓練編），2010年11月3日，
<http://www5.airnet.ne.jp/hukuta/dig/dig.pdf>

日本看護協会（1998）．先駆的保健活動交流推進事業 災害看護のあり方と実践，21－22.

西上あゆみ，渡邊智恵，神崎初美（2009）．新潟県中越沖地震における避難所看護活動 夏期の避難所の課題と看護の役割．日本集団災害医学会誌，14（2），227－232.

山崎達枝（2007）．避難所における健康栄養問題 看護師の立場から．臨床栄養，111（5），618－621.

Effect and future task of “the practice for the simulated shelter experience”

Takeshi HYAKUTA^{* 1} Rieko NAKANOBU^{* 1}

Abstract:

As part of the required courses, “the practice for the simulated shelter experience” was conducted overnight. It assumed that the earthquake measured in the intensity 6 lower occurred and the shelter was placed at the gymnasium. The anonymous questionnaire survey was conducted for 40 participants to clarify an effect of this practice and a future task (collection rate 100%) .

As a result, the total of “understood” which shows the understanding level of this practice was more than 75% in every item. Also the total of “meaningful” was more than 60%. “Promoted the interest in Disaster nursing” was about 90% of the total and “willingness for future disaster nursing activity” was more than 80% of the total. Therefore, I think the practice was effective for the participants. On the other hand, the reality of the shelter was emerged as a future task.

For this reason, it is necessary to consider the pursuing a shelter's reality for this “the practice for the simulated shelter experience” .

Keywords:

shelter, practice, disaster nursing

^{* 1} Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing